

平成21年3月2日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720095
 研究課題名（和文）アイヌ語基礎文法の認知言語学的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Linguistic Study of Basic Ainu Grammar

研究代表者

井筒 勝信 (IZUTSU KATSUNOBU)
 北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70322865

研究成果の概要：本研究は、認知言語学に基づいてアイヌ語基礎文法を網羅的に分析・記述し、その結果を汎用性の高い資料として提供することでアイヌ語の研究と学習・教育に寄与することを目的とし、(1) 基礎文法が伝統的なアイヌ語学でどう扱われてきたかを総覧し、(2) それらの扱いが理論言語学でどう位置づけられるかを同定し、(3) 認知言語学に基づいてどのような観察・分析・記述が得られるかを明らかにした。こうした結果は、今後一般言語学に共通の用語・概念を用いた文法書・文典の形にまとめてアイヌ語研究の進展に資すると共に、基礎文法の概説書・参考書を編集してアイヌ語の学習と教育に貢献することに役立て得る。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	420,000	3,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：アイヌ語、認知言語学、生成文法、機能主義言語学

1. 研究開始当初の背景

従来のアイヌ語研究は、危機言語を消滅前に保存するとの意図から、フィールドワークによって語彙・文法並びに民俗的な事柄を聞き取り、それを記述・報告することに多くの力を注いできた。言語の復興や再活性化という点からの研究は殆ど行われてこなかった。今日、アイヌ語の話者は片手で数えられる程の少数に達し、従来のようなフィールドワークを中心とする研究方法はいよいよ実行が極めて困難になってきた。そこで、従来の「フ

ィールドワークとその報告を中心とした研究」から「コーパスやテキストに基づく理論的研究」へとアイヌ語の研究方法を大きく転換すること、研究成果を提供することで言語研究一般への貢献を目指すことに加えて、学習及び教育というアイヌ語の復興と再活性化に役立てることがいよいよ重要になってきた。

また、伝統的なアイヌ語研究は、その殆どがアメリカ構造主義に代表されるような構造的な分析に留まっており、後に発展した生成文

法・機能主義・認知言語学・語用論・談話分析に見出されるような理論的研究は国内外を問わずあまり行われていない。

認知言語学は、そもそも意味を真正面から扱うことによって生成文法や機能主義の不備・不足を補う一方で、音韻論や形態論の扱う小さな言語単位から語用論や談話分析の扱う大きな言語単位に至るまで共通の認知的原理に基づいて分析することを意図して発展させられてきた。このため、認知言語学の枠組みを利用することで、上記の様々な理論的枠組みの中で扱われてきた広範囲に渡る問題を扱うことが出来る。アイヌ語の基礎文法は、こうした認知言語学的な観点からは是非とも扱われる必要がある。

本研究代表者は、Izutsu(ed.) (2004)で認知言語学的観点から「アイヌ語基礎文法」の大まかな概観を試みている。また、「語順」の項目に含まれる複他動詞と二重目的語構文については井筒(2002a)で、「統語範疇」に属する品詞分類については井筒(2005)で、「形態範疇」のうち人称接辞については井筒(2003a)で、「相」に関しては井筒(1997, 2000a, 2001b)で、「法」に関してはIzutsu(2003)で同様に認知言語学的観点から分析を試みている。その他の数項目について同様な分析・記述を行うことで上述①の(3)を概ね達成することが出来る。

アイヌ語学の研究成果は、公刊(市販)されないか、あるいはされても絶版となっていて入手が極めて困難なものが圧倒的に多いため、理論言語学やその他の一般言語学を専門とする学者、あるいは一つの言語に軸足を置きながら他言語の対照的研究に従事する研究者がアイヌ語学の研究成果を利用することが極めて困難な状況にある。研究並びに学習・教育に役立てられる資料を作成して広く一般の利用に供することで、そうした状況を打開することが欠かせない。また、アイヌ語学がごく限られた数の日本人研究者によって担われ、日本語研究の中の「国語学」と同様、当該語学特有の用語や概念が用いられることも、アイヌ語を潜在的学習者やアイヌ語を専門としない研究者から遠ざけてきた原因の一つである。今後目指される文法書・文典、学習参考書などは、言語学や語学学習で一般に用いられる用語や概念を用いて作成される必要がある。

2. 研究の目的

本研究代表者は、若手研究で以前に採択となった二つの研究課題を中心に過去6年に渡って「アイヌ語の復興と再活性化」を全体構想とする研究を行ってきた。その中であって、本研究課題は昨今意味研究において最も顕著な成果を挙げている認知言語学の枠組み

に基づいてアイヌ語の基礎的な文法項目を網羅的に分析・記述し、その結果を研究や学習・教育に役立てられる資料として編纂し、アイヌ語の研究並びに学習・教育に寄与することを目的とする。本研究では、アイヌ語文法の全容を見渡すために不可欠な文法項目を総称して「アイヌ語基礎文法」と呼ぶことにする。「アイヌ語基礎文法」は、「語順」、「統語範疇」、「形態範疇」、「態」、「相」、「法」の6項目に大別出来る。「語順」には、基本語順やいわゆる構文が、「統語範疇」には品詞とその分類が、「形態範疇」には人称接辞といわれる拘束・自由形態素が、「態」には動詞の自他と受動態・中間態など語法が、「相」には進行相・完了相・局面などの表現が、「法」には助動詞的な表現とその義務的意味・認識的意味が含まれる。本研究課題においては、こうした「アイヌ語基礎文法」が、(1)金田一に始まり現在にまで至る伝統的なアイヌ語学においてどのように扱われてきたのか、(2)そうした扱いは生成文法・機能主義・語用論・談話分析といった理論言語学やその他の一般言語学の中でどのように位置づけられるのか、(3)意味分析を得意とする認知言語学の道具立てを用いることで、これまで知られていなかったどんな観察や記述が得られるのかという3点を明らかにする。得られた結果は、理論言語学やその他の一般言語学においてある程度共通して用いられる用語や概念を用いて文法書ないしは文典の形にまとめることでアイヌ語の研究の大きな進展に資する共に、語学教材に広く見られる用語と概念を用いて「アイヌ語基礎文法」の概説書または参考書として編集することでアイヌ語の学習と教育に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

本研究課題は(1)「アイヌ語基礎文法」が金田一以来の伝統的なアイヌ語学においてどのように扱われてきたのかを簡明にまとめ、(2)そうした扱いは生成文法・機能主義・語用論・談話分析といった理論言語学やその他の一般言語学の中でどのように位置づけられるのかを同定し、(3)意味分析を得意とする認知言語学の道具立てを用いることで、これまで知られていなかったどんな観察や記述が得られるのかを明らかにして、(4)それらの成果を広く一般に利用可能な研究並びに学習・教育資料としてまとめることを目指す。

先ず一年目に(1)を完了する。その達成のためには、主要な先行文献を概観出来る「アイヌ語学概論」的な文献が必要だが、それに相当する研究が存在しない。アイヌ語文法の体系的な研究は、金田一(1931)によって創始

され、知里(1936)によって確立される第一段階と、それが知里(1942)によって大きく修正され、浅井(1970)によって定着が図られる第二段階、また、前の二段階を踏襲しながらも田村(1988)、中川(1995)によって大きな変革をもたらされる第三段階の三つに分けられる。また、個々の文法項目を取り上げて論う学術論文が様々なアイヌ語関係資料に散在する。そこで、これらの文献で「アイヌ語基礎文法」の各項目に該当する箇所を適宜引用し(扱っていない場合はその事実を指摘し)、そこでの見解を手短に解説する文書を作成する。その際、見出されるアイヌ語学特有の用語や概念には、言語学で広く用いられるかあるいは他の主要な言語で用いられる用語や概念を用いて明解な注釈を施すことに努める。こうした引用と解説・注釈は「アイヌ語基礎文法」の各項目ごとに章分けし、多様な用語・概念名称から検索可能な索引を付して『アイヌ語学研究総覧』と題する冊子としてまとめる。

二年目には、(2)を達成すると共に(3)に含まれる多くの課題に取り組む。(2)の達成には、「アイヌ語基礎文法」を生成文法・機能主義・語用論・談話分析の道具立てを用いて具体的な記述を試みるのが効果的である。そこで、それぞれの理論を専門とする研究者やアイヌ語の研究者に『アイヌ語学研究総覧』及び過去の研究で作成したコーパス並びに辞書草案等(井筒編2003a, 2003b)を提供し、「アイヌ語基礎文法」に該当する言語事実をそれぞれの立場から観察・記述の上、論考としてまとめて提出してもらう。提出された論考を『アイヌ語学と現代の言語理論』と題する冊子としてまとめる。

(3)を達成するには、本研究代表者がこれまでに認知言語学的立場から扱ったことのない文法項目の分析を進める。本研究代表者は既に「アイヌ語基礎文法」の半数以上の項目に関して認知言語学的分析を試みて論考としてまとめている。そこで、扱っていない文法項目のいくつかに取り組む。

三年目には(3)を完了し、(4)は『アイヌ語学研究総覧』、『アイヌ語学と現代の言語理論』及びそれに付随して作成される資料によって概ね実現されるが、更には研究資料として文法書または文典を、また学習・教育資料として参考書または概説書を近い将来にまとめることが出来るよう、可能な限りの執筆と編集の作業を進める。

研究資料として目指される文法書または文典は、『アイヌ語学研究総覧』、『アイヌ語学と現代の言語理論』、遂行された一連のアイヌ語の認知言語学的研究で得られた成果を、それぞれを「アイヌ語学史」ないしは「アイヌ語学概論」、「アイヌ語の理論言語学的研究」、「アイヌ語文法概説」等の章にまとめることが望ましい。この場合、「アイヌ語

文法概説」の内容は本研究課題に即して「認知言語学的」視点に依拠するものとする。それに対して学習・教育資料として目指される参考書または概説書は、文法書または文典を「アイヌ語文法概説」を中心に平易な言い回しで要約し、その内容を英語、ウェールズ語、ゲール語、ハワイ語、バスク語の学習・教育課程を参考にして学習者が理解しやすい順序と構成に並べ替えることによって実現を目指す。研究資料並びに学習・教育資料で用いられるべき用語や概念を調査するために、理論言語学者の他に各国語を専門とする研究者及び学習書執筆者に相談し、より望ましい用語と概念について意見を求める。

4. 研究成果

一年目には『アイヌ語学研究総覧』を作成し、二年目にはこれと過去の研究で作成したコーパス並びに辞書草案等をアイヌ語研究の従事者や理論言語学を専門とする研究者に提供して、それぞれの立場から「基礎文法」に取り組んだ論考を提出してもらうことで『アイヌ語学と現代の言語理論』を作成した。

また、これらの作業を進める中で問題となった「二重目的語構文」、「証拠性」、「驚嘆性」などの文法現象は、随時、他の言語の類似した文法現象を扱う論考などで、断片的ないしは体系的に扱い、一般言語学的あるいは理論言語学的観点から、仕組みを明らかにすることにある程度成功した。

三年目はこれら二年間の研究成果を取り入れて文法書・文法参考書の執筆と編集を行った。これら文法書・文法参考書は、印刷・製本をして実際の使用に供するためには、更なる加筆と修正が必要であるが、近い将来それを実現することで、本研究の成果は更に役立てられる。

これらにより、本研究の目的は概ね達せられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

① Izutsu, Katsunobu and Mitsuko Narita Izutsu. 2008. A Cognitive Mechanism of Mirative Connectives. *Ligva Posnaniensis* 50: 127-142. 査読あり

② Izutsu, Katsunobu and Mitsuko Narita Izutsu. 2008. Notional Asymmetry in Syntactic Symmetry: Connective and Accessibility Marker Interactions. Barbara Lewandowska-Tomaszczyk (ed.) *Asymmetric Events*, 121-134. 査読あり

③井筒勝信. 2008. 語根と単語群：アイヌ語を遡るもう一つの試み. 井筒勝信（編）『アイヌ語学と現代の言語理論』, 3-24. 査読なし

④井筒勝信. 2008. 「想定範囲内」からの消失と「予想外」の存在・出現：アイヌ語の驚嘆性(mirativity)表現とその主な概念化. 井筒勝信（編）『アイヌ語学と現代の言語理論』, 217-234. 査読なし

⑤ 井筒勝信. 2007. Evidentiality in Japanese and Ainu. 『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』57-2: 123-136. 査読なし

⑥ Izutsu, Katsunobu. 2007. Change in Possession and Location: A Cross-Linguistic Perspective on the Ditransitive Construction. *Lingua Posnaniensis* 49: 39-49. 査読あり

〔学会発表〕（計1件）

① Izutsu, Katsunobu. A Cognitive Mechanism of "Mirative" Connectives. The Tenth International Cognitive Linguistics Conference. ヤギエヴォ大学（ポーランド） 2007年7月17日

〔図書〕（計3件）

①井筒勝信編. 2008. 『アイヌ語学と現代の言語理論』北海道教育大学. 380頁

②井筒勝信編. 2007. 『アイヌ語学研究総覧』北海道教育大学. 640頁

③井筒勝信編. 2007. 『アイヌ語学研究資料1』北海道教育大学. 336頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井筒 勝信 (IZUTSU KATSUNOBU)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70322865

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし